

渋谷探索トレッキング

渋谷地域会の情報はこちら
<http://www.jia-shibuya.org/>

一万人の世界建築家展
<http://www.10000architects.com/?jp>

渋谷地域会は、UIA東京大会のために「渋谷探索トレッキング」を準備しました。

仕事や生活の場としての「渋谷」を、建築家の視点でピックアップし、トライアルの街歩きを重ね、約半日程度の散歩コースとして構築したものです。
 渋谷の街は、渋谷川と宇田川によって作られた「谷」と、青山・明治神宮・代官山という「台地」で構成され、渋谷駅は二つの川の合流点・Y字の谷底にあり、トレッキングという言葉が馴染みます。

トレッキングコースは、異なる4つのエリアを順次巡ります。
 そこには私達の誇れる場所と、日本の建築家の状況や都市の世界共通の問題点も含まれ、より深い意味を読み取れるようなストーリーが存在します。また地形の特殊性、地政学的な意味も、サブストーリーとして見え隠れします。

■コース概要

Aエリア：「表参道」青山通り側の入り口の台地でスタートします。ここでは通りに面する最近の建築物を見学しながら渋谷川の谷に向かいます。

Bエリア：原宿の裏通りから竹下口に抜け、明治神宮のある台地に入り、「明治神宮」に入ります。90年前に造営された深い人工の森をくぐりぬけて日本の聖域で静謐な空気を体験し、その後、丹下健三設計の国立代々木競技場周辺をまわります。

Cエリア：「渋谷」の公園通りとスペイン階段を降り宇田川の谷に下ります。センター街を抜けて渋谷川と宇田川の合流点・谷地の渋谷駅に向かいます。

Dエリア：ここから電車で「代官山」へ上り、旧朝倉邸を見学後、ヒルサイドテラスをまわり代官山の設計事務所に到着。トレッキングの終点となります。



渋谷探索トレッキングの詳細情報は、渋谷地域会のホームページで公開しています。
<http://www.jia-shibuya.org/>

■コースのポイント

A「表参道」

注目の新建築群は偶然にも建設時期が集中し、設計を手がけた各建築家は同潤会の存続について反応を示しています。ここには都市の記憶と再生の問題が存在します。その後「ブラームスの小径」のような建築家不在の再生事業にも触れます。

B「明治神宮と国立代々木競技場」

国家プロジェクトとしての明治神宮と150年のスパンをもつ森の計画は、すでに90年経過し、周囲とは極端に違う環境を体験し、長い日本の歴史も息づいていることを確認できます。日本を代表する建築作品である国立代々木競技場は、最近修復が完了し、その堂々とした雄姿を見学します。

C「渋谷」

経済状況が直結したような商業地区。様々な欲望が新しい文化の発信活性度を高めるのか街は生物のように変化し、次回訪問時には姿を変えた渋谷を見ることができるほどのスピードです。ここでは、別の意味での建築家不在の渋谷駅周辺の再開発計画に触れます。

D「代官山」

コース到達点にふさわしい、地権者と建築家、住人との幸福な関係、建築家が考える理想的な街のあり方を紹介します。

渋谷の街をトレッキングするというのは、定点観察でもあります。
 環境や問題は時代によって変わり、それに対するリアクションも変わってゆくことでしょう。そして街歩きをする建築家は、きっといつの時代にも存在して、社会に対していろいろなことを発信してゆくことでしょう。
 私たちは2011年UIA大会の街歩きが、そのひとつの機会になればと考えます。



表参道



代官山ヒルサイドテラス



明治神宮



青木 豊	青山 豊	安達 和男	阿部 肇	石原 貞治	泉 貞夫
伊藤増輝	今井 敦	今井 清隆	臼木 達孝	大杉 喜彦	大竹 比呂志
岡部 則之	奥村 三男	小沼 悟	川村 純一	北川原 温	北川原 智
高 俊民	西勝 郁郎	酒井 茂	佐藤 基一	塩田 純一	清水 修司
菅原 賢二	鈴木 慶二	関谷 源次	高階 澄人	竹中 一則	竹内 裕二
富宇加 直樹	中川 達夫	中辻 正明	永松 暁	南條 洋雄	濱田 昭夫
濱田 幸慶	横田 幸慶	福岡 猛	福川 公大	藤島 茂夫	堀 啓二
横田 文彦	三井所 清典	三浦 敏伸	元倉 真琴	柳 学	柳澤 孝彦
柳田 英一	山本 圭介	山本 智雄	山本 盛夫	由井 啓之	吉田 尚夫
吉田 真澄	米倉 満	渡辺 一郎	渡辺 徹		